

精神障害者から見た人々

Vol.7

広田和子

精神医療サバイバー&保健福祉コンシューマー

千葉県元新聞記者 浜谷真美さん(享年41歳)

読売新聞の親しいA記者から「実は浜谷さんが亡くなりまして」という電話を昨年11月に受け、この突然の悲報に私は「え！ なんて亡くなったの？」と聞き返したが、Aさんの返事はなく、無言の中で彼女の意志による死を直感した。「Aさん！ 浜谷さんに私はたいへんな時に支えてもらったのよ。お焼香させてもらいたい」と私は強く言った。Aさんは「そうですね。広田さんの意向に添うよう努力します」と答えた。そのAさんの電話が切れるのを待っていたかのように電話が鳴ったので、気を取り直して出ると、相手は浜谷さんの御遺族だった。

「広田さんですね。実は…真美が亡くなりまして」と言われたとき、私は涙声で「伺いました。真美さんのお通夜か告別式にどうしても伺いたいのですが…。真美さんは私の恩人です」

電話の向こうも涙声で「ありがとうございます。ぜひ来てやってください。でも遺体は茶毘に付してありますので、お通夜はなく告別式だけなのですが…」と言った。

真美さんの苦悩を打ち明けられていた者のひとりとして、告別式の日、私は彼女の遺影の前で号泣した。御遺族と手を取り合っ

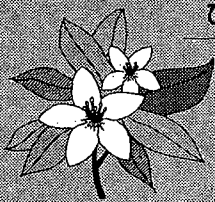
会の予定だったが、世論が過熱していたこともあり、「延期してほしい」と厚労省にお願いしたところ承諾されて、私の意見陳述は9月に延びた。そして、もうひとつの依頼が電話で入った。「国の委員に入ってほしい…。私は迷わず受諾した。この時、ある仲間は「それは国の飴と鞭作戦だ！」と言った。

それから私に対する「合同検討会に出ないで」という声や神奈川県職員からは「広田さんの活動には何の関心もない」と言われて、管理職まで「ここはアメリカでもイギリスでもない儒教の国、日本だ。あなたの発言や書いていることは100%正しいけど、あなたが出ていることすなわち問題だ…」等と言われ、母の死後でもあり、心身の限界を感じ、参考人を断念せざるを得なかった。よく死ななかったと思う。

浜谷さんは「断念は日本の精神障害者全体にとって残念だけれど、自分の生命も大事なものね」と言った。私が「でも鞭を断つたから厚生省は飴も取り消すのかしら…」と言うと「それは別の話だよ。厚労省を、松本課長(当時)を信用したほうがいいよ」と強く言った。

やがて厚労省から正式に「社会保障審議会障害者部会臨時委員」の依頼が来て、身近な記者たちに話したところ「広田さんのキャラクター」と精神医療サバイバーという肩書きで、史上初めて精神障害者が国の委員に就くのなら、新聞の「ひと」欄で取り上げたい」と言われ、浜谷記者は「記者発表の日時と場所は広田さんが決めるのよ」とアドバイスしてくれた。

ひろた かずこ



かつて私は主治医に「文章を書くのが好き」と語っていたところ、それが病状としてとらえられていた時代もあった。インフォームドコンセントのない医療ミスによる注射の副作用で廃人のようになり、鍵と鉄格子のある閉鎖病棟へ緊急入院した体験もある。現在も毎日11錠の向精神薬をのまないと眠れず、のんでも音がすれば眠れないので、横浜市精神障害者住み替え住宅制度を使って山の麓の一軒家に住んでいる。長年、日々の活動を通して出会った人々のことを書くのが夢だった。